

バシュラールの想像力理論の理解をめぐる

及川 馥

拙論の目的はまずひとつのバシュラール論を反駁することにある。いくつかの誤解をときほぐし、そしてバシュラールの質料的想像力理論の理解を少しでも進めたいというのが拙論の真意である。

批判の対象とする論文は『ポエティック』という雑誌に掲載された。この雑誌は「文芸理論と分析の雑誌」と副題にうたつてあるように、フランスにおける新しい文学研究を推進してきたひとつの中心的グループの機関誌で、すでに十年間きちんと季刊を続けている。その四一号（一九八〇年二月）の「再読」という見出しの下に、カトリヌ・クヌマン「バシュラールの質料的想像力」と題する九ページの一文が、英語からマルク・ポレとマルク・ルロワの二名の手で仏訳されて掲載されたのである。筆者クヌマンはメルボルン大学に所属している。

さて、この論文には「理論か瞞着か」という副題がついている。しかも「再読」という見出しと「バシュラールの質料的想像力」という論文の題とは一見びつたりしないように思われ、またこういう副題までついているので、論文を読む前に、筆者あるいは編集者の意図が、バシュラールに対し否定的、あるいはどうひいきめに見ても消極的であることがうかがわれる。このことにまず注目しておかねばならない。

この論文の内容はバシュラールの『水と夢』（一九四二）の再検討である。したがって「再読」という見出しは『水

と夢』の再検討という内容についてであればはいえない。しかしこの論文はほとんど『水と夢』だけしか取上げず、『水と夢』以前と以後の質料的想像力を扱った著作をほとんど考察していない。だとすれば論文の題名はいささか拡大しすぎではあるまいか。

私がこうしたところにまずこだわったのは、筆者クヌスマンが、もっぱら『水と夢』一作を論じるのであり、『火の精神分析』（一九三八）を一度引用しただけで、『ロートレアモン』（一九四〇）、『空と夢——運動の想像力論』（一九四三）、『大地と意志の夢想——力の想像力論』（一九四八）、『大地と休息の夢想——内密性のイマージュ論』（一九四八）をまったく無視し、言及することもないからである。これらの著作はそれぞれの副題から推測されるように文学的想像力をめぐる考察であり、『空と夢』からはいわゆる四大元素によって文学的想像力の作用を分類し、綿密な実例分析を試みた連作であり、また質料的想像力はこれらすべてに適用された概念なのである。してみると、クヌスマンの狙いが『水と夢』一冊だけを狙上りのせながら、バシュユールの想像力理論全体を攻撃することにあることは明らかであろう。

もちろん理論的な発展を重ねながら構成された連作といえども、一作だけを独立させて考察してはならないという規則はないし、四部作とはいえ、バシュユールのこれらの著作はかなりの独立性をもっており、単独にとりだして読んでもまったく意味が通らないということはない。しかし、たえず連作という制約がつきまわっていることは読者がつねに念頭におかねばならないことである。それはバシュユールが序文においてみずからの方法について述べている文章を理解する場合にとくにいえることである。しかもクヌスマンの狙いが、バシュユールの理論体系全体の核心をつくことであれば、なおさらのこと、せめて四部作を頭に入れて、この『水と夢』の批判をおこなうべきではないか、と私は考えるのだが、どうもそうした常識的な準備作業はほとんど無視されているようである。

それどころか、クヌマンは『水と夢』の中から疑問をとりだし、それに対し適切な答えを『水と夢』において発見できないときは、みずから適当な答えを与え、そしてそれに基づき評価をおこなうという方法をとっている。パシュラールが、いちいち前者の何ページを参照せよとことわらず、前者の考察をふまえて議論をすすめている場合に、たんなる文章上のあげ足とりの論議で攻撃を受けるとすれば、そしてそういうことが作品の独立ということよきな命題によって許されるとすれば、哲学者の論文は龐大な注のために前進がはばまれ、前提の地盤整備に追われていつも一階だての理論構築に甘んじなければならぬことになるのではないだろうか。(2)

一

さてクヌマンの論文は、とくに章別になっているわけではないが、一行あけの個所が六個所あるので六節に別けることができる。まず最初の二節は形相的想像力と質料的想像力の区別の問題、ついで四大元素の問題、そのあとが元素と美的判断との関係、パシュラールの表現の問題、最終が質料と文学の関係をとりあげて結論ということになるであろう。以下、ほぼこの順序でクヌマンの所説を紹介し、パシュラールの主旨とくい違ふ点を指摘し、反論を試みることにしたい。

だがまずわれわれは予備知識として、『水と夢』序論中での人間精神の想像する力に二つの方向を認めようとするパシュラールの考えを知っておく必要がある。

「ただちに哲学的に表現するなら、二つの想像力を区別することができよう。形相因に生命をあたえる想像力と質料因に生命をあたえる想像力と。」別な角度からいえば、「想像力の心理学者によってきわめてしばしば喚起される形相のイマジニ以外に、質料のイマジニつまり物質^{マテリエル}の直接的イマジニが存在している。」それを区別するパシユ

ラールのことばをもう少し聞いておこう。「それら（イメージ）に命名するのは視覚であるがそれらを知るのは手である。」⁽³⁾パシュラールによれば、従来の美学の中では形相因の考察が大半を占め、質料因に於ける考慮が不足しており、質料因は「形相因の欠除態」⁽⁴⁾のように一段低く評可されていた。したがってパシュラールは想像力のこうした二つの機能をひとしく認め、完全に分離することの不可能さを十分に承知しつつも、『水と夢』においては、とくに理論を略述した序文において、質料的想像力の機能を力説する。しかし本文中のイメージ分析においては、イメージの全体的な把握を目的とするため、形相的想像力の考察もおこたつてはいないのである。

さてクヌマンはこういう。「パシュラールは『水と夢』の冒頭で質料的想像力とその反対概念の形相的想像力をもったいぶって区別しているから、この二分法がかれの美的判断の本質的なものと考えたくなる。こういう仮説はそのうち根拠がないことがわかる。なぜなら『水と夢』の本論中では、形相的想像力の考えを進め、かなり長く展開したあとで、あまり成功しない作品は大てい形相的想像力に依拠しているとほめかけた後、それを放棄してしまうからだ。」⁽⁵⁾

ところがパシュラールはイメージのフォルムの問題を『ロートレアモン』においてとりあげ、とくにその変貌の秘密について考察しているし、その結論部分でアルマン・プチジャン『想像力と実現』（一九三六）を援用しつつ、形相因と質料因とが想像力においていかなる作用をはたすかを考察していたので、この二分法はたんなる思いつきではないのである。だから『水と夢』においての水の反映など、ナルシス的な形相の分析は、いわば質料との対比の副次的分析であり、決して根拠なく放棄されたりはしていないのである。

クヌマンはしかし面白い指摘をしている。「質料の△直接的▽イメージ（質料的想像力）は△消えやすい形相▽、△はかないイメージ▽、△さまざま表面の生成▽（形相的想像力）に対立する。まちがいなくプラトンの

な価値の興味ある逆転だということをついでながら指摘しておこう。プラトンにあっては質料は消滅するが形相は持続するのに、バシユラールは逆のことを主張するのだ。⁽⁶⁾

この点については確かにそうかもしれない。しかしバシユラールのフォルムに対する警戒心は、それが静止的、固定的である場合に強まるのであり、しかもイマージュの世界においては形相因はともすれば硬化し、色あせ、衰弱していく傾向があるだけに、そうした無気力さを免れるためにも質料が有効なのであり、また運動を忘れてはならないと考えるのである。「想像力はつぎの場合にしかフォルムを理解しない。すなわち、想像力がフォルムを変形する場合、その生成を力動化する場合、形相因の流れの一断面クニブとしてフォルムを捉える場合」というほど、バシユラールはフォルムを躍動的に捉えていることもあわせて付記しておかねばならない。⁽⁷⁾

ついでながらイマージュを重視する立場をバシユラールが意識してとった理由についてここでふれておこう。というのは『科学的精神の形成』⁽⁸⁾(一九三八)においてきわめて多数の例が示すように、人間はイマージュのとりこになりやすい存在であり、デカルトの海綿の例のように宇宙像にまで拡大され、ほとんどイデーの域に達するイマージュがあるからである。バシユラールのイマージュ観の根底には、もちろんかれ自身の個人的体験にもとづく生きいきしたイマージュ群がある。それに加えて十八世紀前後からの自然科学形成期の諸理論を支配した強力なイマージュ群が、バシユラールの本業であった科学史、科学認識論の研究の過程で浮上してくるのである。イマージュに操られる存在としても規定されるような人間性すらそこには見られる。バシユラールの想像力理論では、プラトンのイデーに匹敵する持続性がイマージュにあたえられているのである。イマージュの形相面より、質料面の方が重視されるのは、くりかえしているが、単なる思いつきではない。イマージュの躍動的、活性的な捉え方がそうした質料への傾斜をうみだしたのである。バシユラールは早くに「プラトンの实在論」(『近似的認識論』)というような思考の機能的カテ

ゴリーを構想し、事実ベツタリの実^{レアリスム}と空疎化しがちな観念論^{イデアリスム}とを、理論的に活性化する方策を考えたことさえある。クヌスマンの指摘はそうした背景をおそらく知らずにおこなわれただけに、われわれの興味をひくのである。

さてクヌスマンは質料と形相の区別について執拗に疑問を投げかけ、「バシュラールによれば」形相的想像力は表面の領域に属し、質料的想像力は深部領域に属する。なぜ形相的想像力を否定的な光の下で見えるのか。変貌や表面について書くことがどうして深さや永続性について書くよりも美的に受け入れがたいのか。」とまでいふ。フォルマリスムの傾向が強いこの雑誌からすれば当然生じてよい疑問であり、この筆者はそれを代弁していると私は推測するのだが、バシュラールのこうした深さを好む、いわば入手による認識 \checkmark を、 \wedge ことばのまやかし \vee だと断言してはばかれない。しかしイメージを質料的に捉えることは、究極においてイメージの構造を捉えることなのであり、そのためにはイメージを視覚によるだけではなく、手で捉えること、つまりイメージの内側に、内奥に入っていくかあるいは奥底に下降する心的操作が必要だとバシュラールは考えたのである。しかもこの操作には表面よりも深部に価値をおくことが前提となるであろう。未知のものを隠すものの深さが追求を誘うのだから。

\wedge ことばのまやかし \vee と切りすてたあとでクヌスマンは、次のようにバシュラールの考え方を皮肉っている。

「表面のイメージ群は表面的であり、深部のイメージ群は \wedge 深い \vee とわれわれがいうことは、われわれが深部を深刻に考え、またより深くないことは表面的に考える、ということ(9)を証明されたがっているということだ。したがって形相的想像力をさげよう。それは必然的に深くはないはずだから」(10)

この発言は期せずしてクヌスマンの方法を露呈させている。表面のイメージが表面的だということは、表面が浅薄で、深刻ではないという裏の意味を暗に述べているのだと決めつけるのは、バシュラールの深層心理学への傾斜を

皮肉ったつもりなのであろう。だが言語表現がすべてであるクローヌマンは、それを表面と深部というふうに単純化して二分し、その間の対立のみを見て、現実とのレファランスを視野から除外してしまうのである。想像力のように複雑な対象に何とか接近しようとさまざまな試行錯誤を不完全な言語で繰返すバシュラーの事はナンセンスとしか思われないのであろう。同義反覆的な狭い言語表現しか認めないのであれば、バシュラーの文章のように矛盾をあえて含みこみ飛躍の多い表現はへまやかし∨としか判断しようがないだろう。だがしかしクローヌマンの思考の二分法は、加法と減法のみしか正しいとは認めないような固定的な思考法であるように思われるのである。

さらにこの筆者はバシュラーの分析が文学的で、隠喩を多用するあまり、基本的な哲学的概念を比喻のような間接的手段で代用していると非難する。そして質料的想像力のメカニズムを記述するために用いられた芽ばえのイマージュは、いかに読者におどろかせようと「それは質料的想像力と創造の間の結びつき⁽¹¹⁾の存在や、そしてともかくバシュラーがそれに割当てている役割を本当に証明することはできないだろう」という。

こういう批判の仕方はバシュラーの当然予期したことである。とくにまずイマージュの分析方法については、哲学的、心理学的に客観性を保証された方法が実際に存在するのであれば、バシュラーは当然それを使用したはずである。その後サルトルやメルロー・ポンチの現象学的な研究は出たものの、それすら果して文学的イマージュの分析に容易に應用できるかどうか議論の分かれるところであらう。しかも文学的イマージュの分析は昆虫標本のようにピンで止めたイマージュを対象とするのではない。生きてひらひら飛んでいる蝶を捉えることが問題なのだ。

このイマージュを生きたまま捉えて観察するために、あるいはまた観察した結果を生かして表わすために、バシュラーの表現の比喻は意識的に採用された方法なのであり、文章の多義性^{アンビギュイテ}もまたそうした意図のもとに読者に対して意識的に設けられた跳躍板なのである。読者はそれを跳ばなければバシュラーの表現の目ざすところには決して

到達できない。読者の飛躍の努力によってイマージュの蝶も読者の心の中でひらりと舞い上るのである。したがってパシュラールの表現は二重の目的を与えられたメタ言語だといえるのではあるまいか。

もう一度クヌマンの文章にもどうう。いったい「創造と質料的想像力の結びつきの存在を本当に証明することなどできるのだろうか。本当にクヌマンはこの文章の意味を理解して述べているのだろうか。創造クレイションと想像力とが密接な関係にあるとはだれしも口にするのだが、それを本当に証明する√ことなどかつて実現したことがあるだろうか。いったい本当に√ということばがどれだけの厳密さを要求しているのか、ふんぞりかえってパシュラールを決めつけている御当人はまったく御存知ないように思われるが、『近似的認識論』の二ページでも読んだなら、こんな失礼な表現をしなくなったであろうに、と残念に思うばかりである。

さて、自然科学における認識、しかも新しい原理の発見に即した認識体系の改革という問題にとりくんだパシュラールが、想像力という主観的で雲をつかむような問題の解明に乗りだした状況や意義をまったく無視しておきながら、この質料因と形相因の区別にはアリストテレスのカテゴリー概念を利用していることについて、鬼の首でも取ったような指摘をクヌマンがしているのはなぜか。『ロートレアモン』の結論部分でパシュラールはアリストテレスの名は出さずに論じているのだが、この区別をどういうわけかクヌマンは「無意識的ではあろうとパシュラールのカテゴリーの第一の基盤であろう」という(12)。どうして△無意識的√でなければならぬのか。「[パシュラールが]ポエジーにおいて質料因が形相因よりもいわば実在的レインであると述べているとき、アリストテレスの読書の結果をそこにおそらく見なければならぬ」(13)などというトンチンカンなことを並べている。クヌマンにアリストテレスのカテゴリーについての知識がたまたまあった、ということしかこの文章は意味していないのである。△実在的√というこの断定はいかなる根拠があるのかクヌマンは示していないし、プチジャンの本のことも指摘していないのだから、パ

シュラールの考察の筋道をまったく無視した独断であるし、『ロートレアモン』すらクヌマンがろくに読んでいないことを暴露したわけである。

二

パシュラールが想像力の問題を扱うにあたってどれほど慎重であったかを一切配慮せず、クヌマンはこういふ。「パシュラールはおそらくそれと知らずにだろうが、フランス語の△形相的√と△質料的√という用語のいくつかの意味の間で躊躇する。」⁽¹⁴⁾「いったい何事かと思えば、「△質料的√という語で、ある場合に質料に固有なものを意味し、ある時は第一原因とか本質的原因の觀念を意味し、しかも一向にその意味のずれに気づいていない。」⁽¹⁵⁾ということなのである。パシュラールが質料因をまさに第一原因とみなしていることは自明のことではあるまいか。どうしてパシュラールがそれを意識しなかったといわねばならないのか。この点についてクヌマンが具体的な例を出していないのはつきりしない点があるけれど、自分の重大視して欲しい形相因をパシュラールが重視していないことへのたんなる逆うらみのようにすら思われる。

さらにパシュラールは「ひとつの文学作品の真の意味を質料の中に、したがって作品の領域外にすえようとするその意図により、マルクス主義的発想、フロイト的発想、あるいはもっとも伝統的な意味での歴史的発想の批評家たちの間に位置することになる。」⁽¹⁶⁾

△文学作品の真の意味√をパシュラールはどのように考えていたのか、ということ実はクヌマンのいうほど単純ではないのであるが、しかしそれを質料の中とか△作品の分野の外√とかに置こうとしたと断定されるいわれはないであろう。もちろんパシュラールは質料のイマージュを文学の重要な要素であり、文学的な美の本質をなすものと

は考えているけれど、質料的想像力と質料とを同一視はしていない。このすりかえはクヌスマンの策略である。しかもクヌスマンの批判はさらに進む。

「バシユラールと同様こういう批評家にとり、文学は付帯現象となり、ここでは文学作品そのものよりも文学作品が表わすものの方に重点がおかれる。」⁽¹⁷⁾ジャン・リカルドーの名前が引きあいに出され、かれのいう「オールド・テキスト」の方がテキスト自体より重視されると、テキストは「冗漫で無意味なもの」となるのだと決めつけられる。文学作品は、人間にかかわるすべてのものを含みうるゆえ、歴史学、心理学、社会学、政治学など多くの学問への素材を提供することが可能であるが、文学研究とは「テキスト」を一步も出ることなく研究することであろうか。いったいこのテキストとは何か、クヌスマンはテキストをどのように定義するのか、一向に定かではないが、クヌスマンのバシユラールの論し方からすると、文学ということばの狭い概念から一步でもはずれたら、すべて文学外に追放されそうな気がする。この点についてはロラン・バルトの「作品からテキストへ」などに見られる柔軟なテキストの把握とは大きなちがいがあるように思われる。バルトは「テキストは人が書くことと読むことの間にある距離をなくそうとすること(19)を求める」などと、バシユラールの考えにきわめて接近した理想的な読者の立場から発言しており、それに比較するとクヌスマンの「テキスト」の観の硬化した傾向がはっきりする。

三

質料的想像力という考えは地水火風という四つの元素によるイマジユの分類にバシユラールをおもむかせる。これがバシユラールの想像力研究を飛躍させ四部作を書かせことはくりかえすまでもあるまい。

クヌスマンはその問題を論じるに先だち、「バシユラールはその科学者としての素養にもかかわらず、現代科学や

常識で定義されている用語によって、質料マテリアルを論ずるところか、古代ギリシャがあたえた世界解釈アンタケツレグションに忠実だ(20)とバシユラールをこきおろす。ソルボンヌの科学哲学の教授の科学的知識を疑惑の目をもって眺め、まさに科学者としてすら失格だといわんばかりである。

「バシユラールはギリシャ古典哲学から存在の四つのカテゴリーをひきだした。しかもそれは四元素——それらの元素がつねに何らかの重要性をもつと想定してのことだが——がおそらく西洋文明においてしか役割をもたず、そして存在論的価値も根本的な心理的価値すらもたないことを証明するためである。」(21)

なぜこのような重大な発言をカッコに入れてつけたのか不明であるが、バシユラールが四元素の分類を西洋文明内でしか有効でないという風に考えたことは事実としてはない。分類の発想をギリシャ哲学に求めたことは、アフリカや中国の神話を資料として考察する制約にはなっていない。フレーザーの『金枝篇』が『火の精神分析』で批判されているのをクローヌマンは見落したのだろうか。バシユラールが求めたのは人類に普遍的な想像力の作用である。次に四元素の存在論的価値とは私には何を意味するか不明であるが、それをもたないとバシユラールが証明しようと努力した風には見えない。第三の「根本的な心理的価値すらもたない」ということを証明するためにバシユラールが書いたということは、明らかに正反対のことであり、クローヌマンがバシユラールの試みをまったく失敗だったと評価していることを示すのであろう。その当否はひとまず論外として、この論者が評価と事実とをこのように混合するのは八まやかし✓という卑劣な手段ではあるまいか。

『火の精神分析』においてはバシユラールはまだ四元素による分類をはっきり着想しておらず、火のように人類が深い交渉をもってきた物質、火のほか水とか空気とか、あるいは塩、酒、血などによって想像力の作用を分析してはどうかと、『科学的精神の形成』における誤謬心理解明の方法の延長上に立って提案している。その後、形相と質料

を区別する視点によって、始めて四元素によるイマジユの分類に自信をもつのである。

それについてクローヌマンはこういう疑問をだす。「バシュラールは質料のこの概念が科学の目から見てのりこえられたことは正確に知っているが、それがかれに美的快感をあたるゆえかれの世界観の基礎とした」⁽²²⁾。そしてこの根拠としてバシュラールの一行を引用する。「またもしこういう単純で強力な哲学が今なお確かな信頼をあたえる泉であるとするなら、それらを研究することによってひとがまったく自然な想像の機能^{フイレンス}を再発見するからである」⁽²³⁾とところがクローヌマンは「元素は人間の想像力とは別個の独立した存在をもつのかどうか」⁽²⁴⁾それとも「偽似科学」、神話的、詩的手段にすぎないのかという問いを投げかけるのだ。

クローヌマンの目から見ると、バシュラールは二つの態度の間でゆれ動いているらしい。「第一の解釈によれば、元素は生の事実であり、人間の手で作ったものではない。元素は現実に存在し、また世界と同じ実体よりなる。△偽似科学√はするとバシュラールの目には真実となる。そして元素は想像力の単独の世界に属するとはもはや断定できない。別の解釈によれば元素は世界と同一の実体ではなく人間の想像力の産物であり、心理的かつ詩的な大きな有効範囲をもつが、世界の次元とは関係をもたない。バシュラールはこの二つの面^{フレイツ}の上でたわむれようとする。元素(質料)はわれわれの想像力の産物であると同時に外部世界に属する実在の本体^{アンシャ}である」⁽²⁵⁾。

ごらんのように四元素の実在を認めるのか、想像力の産物なのか、どちらかに決めなければならないという議論の立てかたは、クローヌマンのいわば常套的な二分法である。

すでに述べたように、バシュラールはイマジユを形相因と質料因の二つの面から捉えることに着目して、次に質料因の分類を四元素というギリシャ古来の分類法にたよって構想したわけである。この四元素はもちろん外部世界のあらゆる存在を分類する基準なのであるから、その中にふくまれるものは当然現実に存在するはずである。しかし同

時にその分類法自体が人間の考案したものであるから、人間の手を加えた産物だといえないことはない。

バシュユールの分類は本質的には関係概念であって、実在をめぐる想像力の機能を把握することが目的であることは明らかである。したがって四元素が本当に実在するか、あるいは四元素の分類がはたして実在をくまなく網羅しているかという検討は問題外なのである。むしろ、四元素が存在すると考えられたということ、過去の長い期間そうした分類が多くの人々に信じられてきたという事実だけで、十分その根拠はあたえられていると考えるからである。

しかしここで注意しなければならないことは、こういうふうに仮定することが、想像力の中でこの四元素は実在と等しい存在価値をもつ、つまり世界の実体と見られていることを否定しない、ということである。想像力が活発に活動しているときには、それは想像的世界をあたかも実在の世界であるかのように見なしているのだし、また、四元素が信じられていたという歴史的事実は、現在の人々が明らかに想像力の所産とみなすものを過去においては実在と見ていたこと、つまり想像の所産と実在を区別できなかったことをも示しているのである。

クローヌマンの文章には、よく見るといくつかの歪曲がある。たとえば「元素が世界と同じ実体よりなる」とすれば、「 \wedge 偽似科学 \vee はするとバシュユールの目には真実となる。」という表現は想像的世界の中の \wedge 真実 \vee を、実在の真実とすりかえたのである。今度は逆にこういう。「元素は想像力の単独の世界に属するとはもはや断定できない」と。「想像力の単独の世界」とは何を意味するか定かではないが、想像力の世界がすべて想像力が作りあげた部分のみ作られているとすれば、そういう世界のことであろうか。いったい想像力の世界に登場するたんなる事物、花とか木とかは想像力の世界にだけ属するといえるのであろうか。想像力だけで何か実在が作れるのだろうか。

ともかくクローヌマンは実在と想像力の産物を判然と区別できると考えているのであり、少くとも人間の想像力だけでものを作ることができると考えていることは明らかである。

したがって第二の考えは想像力の産物を実在化する立場を設定する。そしてそれは現実の「世界の次元とは関係をもたない」ことにされてしまふ。だが、そんな区別はまやかしにすぎない。子供は夢みたものしか欲しがらないし、また世にいう観光名所や歌枕などは、まさに想像力のなかでまず人々がつくりあげたイマージュが今でも現実の世界のひとつの次元と深い関係をもつ証拠としてあげられるであらう。⁽²⁶⁾一本の何の変哲もない峠の松の木が、どうして他の松とちがった評価を受けるのか、想像力の介入をまたずに説明できるであらうか。

クローマンが冷笑をこめていう、「パシユラールはこの二つの面の上でたわむれようとする」とは、決して不合理なことではないのである。したがって「元素(質料)はわれわれの想像力の産物であると同時に外部世界に属する現実の本体である」という結論は、あくまで想像力の世界においては正しいのである。つまりこの文章の後半について、元素を「外部世界に属する現実の本体」とするのも想像力のなすことだからである。だからといってそれは決して外部世界の存在を否定することを意味しない。ただ元素を外部世界の「本体」だとみなすことはあくまで想像力の機能なのである。本体とは想像の世界における価値付加作用の結果でなくて何であらう。四元素はそうした想像的価値を担った存在として最初からパシユラールによって設定されているわけである。

パシユラールはその区別をあまり繰返しては指摘しないが、もの自体とか、現象そのものというような場合でも、自然科学の対象となる場合は、必ず人間の手によって自然から取りだされたものであり、そのとき必ずある種の変形がおこなわれるし、対象の選択自体にも主観が働いているということを指摘しているくらいだし、また主観というものが、いかに先入観、経験などによって動かされるかということも力説しているだけに、始めから想像力の研究ということを目的とした本書においては、あえてそうした初歩的な問題にふれる必要を感じなかったと考えられるのである。

しかしパシュユールは想像力の問題を扱うにあたり、自分の思索を深めるだけではなく、できるだけ客観的な方策を模索したことも忘れてはならない。

たとえば、水という元素に対し、形成期の自分の個人的な経験をまず述べ、次に文学作品を中心とする資料によって想像力の動きを追っている。読者はその資料を解釈するパシュユールの主観性に対し、前もってある程度の知識をあたえられているわけである。したがってパシュユールの記述は、水に対する詩人や小説家の想像力の反応と、それを解釈するパシュユールの経験と、さらにそれを読む読者の水に対する経験という三つの要素が、それぞれの位置を明確にすれば、かなり有意義な関係を設定しうるように想定されている。かれの文章から読者があたえられるレアリの印象はそうした構造から生じるように思われる。

イマジユと実在との関係をシエマ化するなら、一方に観念や概念に接近する抽象的方向と、ものに接近する具象的方向とがあり、その二極間をイマジユは揺れていると想定される。しかも想像力内のものの側の極は、外部世界との通路である感覚によって、現実の無数の情報を吸いあげていて、形相はもとより質料にも大きな作用を及ぼしている。この場合、ものの側の極を外部世界の実在と同一化したり、単純に固定化してはクヌマンの誤りをおかすことになる。極自体も移動しているからである。

〔人間の想像力の産物であるこれらの実体は想像力の外にあり、どうして想像力を説明するといえることができるのか〕⁽²⁷⁾ というような形式論理の矛盾を勝手に作りあげることになるであらう。

そこからさらに「元素が想像力を形成する」のではないから、結局パシュユールの仮説は「科学的に間違った特性によって効力をうばわれており」したがって「精神に対する地水火風の特別な影響は単なる仮説にとどまるのであり根拠もなく、証拠もなく進められたものである」⁽²⁸⁾ という結論がクヌマンによって出される。

想像力の機能を分類する関係概念を、実体概念とみなし、実在するかしないかを問い、そこから当然実在しないという答をひきだし、したがって△科学的に間違った特性▽という結論をだし、今度は「精神に対する地水火風の特別な影響はない」⁽²⁹⁾と断定する。このクローヌマンの論の運びは、精神と想像力をすりかえ、また△特別な▽という限定を影響につけておくという用心をしながらおこなわれていることをまず指摘し、この四元素という仮説が△精神▽に対してどんな大きな効力、△特別な影響▽をもつかには、それが何百年も人間の精神に信じられてきたという歴史的事実が十分な根拠であり、証拠であると答えよう。しかもそれはバシュユールの全然無関係なところで成立していた事実であり、かれはそれを借用したにすぎないのである。このような非科学的な原理が實際長期間にわたって人間に信じられていたという事実が、バシュユールに対し、なぜそうした原理を人間が求め、信じたのかという疑問をなげかけ、かれを人間の想像力の特性を探ぐるといふ作業におもむかせたのだ。どうしてそれが根拠のないことなのか、だれしも理解に苦しむのではあるまいか。

四

クローヌマンは視点をかえてバシュユールの擬人化、アニミズムの傾向に批判をくわえる。あるいは質料的想像力が人間に普遍的な共通のものか、それとも特定の個人にのみ固有の特殊なものか、というような問題をとりあげ、バシュユールが悪循環におちいつているという。あるいはこういうバシュユールの試みは詩的インスピレーションを説明するためなのか、それとも美的判断の基準を作りだすためなのかというような問いをだし、バシュユールが詩的ヴィジョンの△創造的なエラン▽と作品の美的享受とを区別しないことを批判し、創造と批評とを分離する二十世紀の文学批評の一般的傾向に反するときめつける。⁽²⁹⁾ いずれも質料的想像力の普遍性と、文学作品の特殊個別性という問題に

帰結するのであるが、これはまったく同じ次元での議論ではなく、とくに後者は表現のレベルで、想像力以外の文学の構成要素を加味して考察された文学作品の総合的価値である。もしイマージュのレベルでこの問題を考察するとすれば、作家の個性の問題はイマージュの新しさの問題となるであろう。そしてそのことについてはパシュラールは完全とはいえないにしても多くの考察を進めているのであり、また享受と創造にしても、かれ自身の立場はあくまでも読者の立場でありながら、あたかも作品をみずからのために書かれたもの、さらにはみずからが書いたかもしれないようなものとして積極的に享受するという視点をとるのである。⁽³⁰⁾

クローヌマンは「二十世紀の批評の一般的傾向」が「創造と批評の活動を分離する」というが、今世紀の動向が果してそうであるかどうかの議論はおくとしても、創造活動は確かに作者の独占作業であり、作品形成に余人の干渉を許さない秘密が存在することは事実であろう。(すでにふれたことだが質料因と創造との関係の証明など第三者にはとうてい不可能事であり、またおそらく作者でさえその△証明▽は困難なことではあるまいか)。

しかし読者が作品を通して作品の世界に奥深く参入し、作品を形成させたエランに触れるほど強力に作品と同一化することが、批評活動を開始する前に、読者としての批評家に要請されていることも、また否定できない事実であろう。クローヌマンは、はたしてそういう前提にたつて△創造と批評の活動の分離▽をいっているのであるか。ここで△一般的傾向▽というテキスト外の既成概念の導入で、テキストを裁断する暴力的行為をおこなっているのではあるまいか。

パシュラールが質料的想像力の説明にあたり、無意識のある次元に文化コンプレックスを設定したことについて、あるいは精神分析的な手法を適用したことについて、クローヌマンはそれほど深い関心をはらわれない。それは△テキスト外▽の問題だからであろうか。

しかし、バシユラルが \wedge 夢幻的現実 \vee を作品の深い意味にふれる前に明るみに出すべきだとクーンマンはいうが、もしこの \wedge レアリテ・オニリック \vee に四元素のひとつをあたえるのであれば、作品の深い意味は複雑^{コンプレックス}ではない、単純なものになるのではないか、というようなあげ足とりは忘れないのである。どうして元素が単純なのか、ここでも分類のカテゴリを単純な実体に置きかえる幼稚なアトミスティックな操作で \wedge 矛盾 \vee を作りだしているにすぎない。複雑であるかないか、本文の実例によってみれば判明するはずであり、文化コンプレックスというバシユラルの概念がもつ困難はもっと別の種類のものであることが分るであろう。

「フォルムにそれらの適切な質料をあたえて研究できるようになったとき、始めて人間の想像力の完全な理論ができるだろう。」⁽³¹⁾というバシユラルのことばをもとに、クーンマンは次のように皮肉をいう。

「どんな作品もバシユラルによれば質料的想像力の上にある。ひとたび各作品がきちんと「内容が」目録化されるようになれば、それぞれ固有の元素をあたえることができるだろう。」⁽³²⁾

さらにクーンマンはこういうふうに変長する。

「文学作品の題材、主題、イマジジュは、表面がどんなものであろうと、四元素のひとつがつねに深い現実的題材^{レユエツエ}なのである。極端にまでおし進められると、バシユラルの理論は結局還元^{レデユクトリス}的であるという正体を明らかにし、そしてそのことにより根拠を欠くこと、あるいは証明不能であることが明らかになる。」⁽³³⁾

この文章の前半は、四元素をあらゆるものの分類原理として採用したのであるから、当然といえば当然である。もちろん四元素と題材、主題との関係は複雑であり、そのためにわざわざバシユラルは実例にそくして繊細微妙な分析を進めているのだし、それがすべて成功しているわけではない。だがそれを一顧だにせず、クーンマンは形式論理を極端に手前勝手に進める。いったい「極端にまでおし進められて」「結局選元的である」正体をもたない文芸理論な

ど存在するのであろうか。「もし、を重ねたら、ビンの中にパリを入れることができる」というけれど、クーンマンの論理はこのへもしの好例で、パリどころか地球だってビンの中に封じこめかねないような、ラクダに針の穴を通らせる論理なのである。問題はバシユラルの実例が極端にまでおしつめたか、還元的なか示しているはずなのだが、この論者はバシユラルの序文からほとんど出ようとしない。この序文の方法論の論理が間違っているのだとすれば、そういう方法論に従った分析や実例など何の価値もないというのがクーンマンの考えであらう。

そうした仮定の前提に立ちへ還元的だという仮定の結果から、根拠がない、証明不能であるというへ真実の結論を導き出すのである。これはファッショ的な論理、恐るべき専制的な論理ではあるまいか。

「もし批評の通常の基準（作品の内部的整合性、作者の作品全体の中の位置、構成の時に生きていた規則との関係）に頼っても、ひとつの作品が、その表面的題材シユクエ・アブランにもかかわらず、四元素のひとつからへ実際のへ着想や意味をひきだしていることを証明するにはいたらないとすれば、なぜバシユラルの質料に対する不当な断定を認めるのか。換言すれば、いかなる芸術作品も元素の中に真のその題材や源泉を見いだしているということをわれわれに認めさせるようなものは、事実の中に何もないのである」⁽³⁴⁾

こういう断定を導きたいことは最初から目に見えていた。へ実際のへとかへ真のへという条件を重要な語の上につけている用心ぶりは見上げたものであるが、この形式論理の絶対主義者は、『水と夢』においてバシユラルが論じている作家たち、ポー、マラルメ、クロードルや、シェークスピアなどの作品は芸術作品ではないというつもりであらうか。これらの具体例に即しつつ、どこがへ実際へではないのか、どれがへ真のへ意味から遠いのか明示すべきであらう。しかもクーンマンのへ批評の通常の基準へなるものが、おそろしく大雑把なことも、バシユラルのイメージの分析の精緻さを把握できない理由であらう。いったいへ作品の内部的整合性へやへ構成の時に生きていた規則へ

などが今どき批評の基準として通用するとまじめに考えているのであろうか。イマジユと作品のテーマとの関係は確かに重要であり、テーマと作品構成の関係についてもバシユラルがあまり考察していないだけに、今後の残された重要な課題ではあるのだが、もはやそうした議論は無駄らしい。

「たとえバシユラルが定義によってこういう確信を真実だとしても、そのときわれわれはそれを認めることはできないだろう。かれの確信はそれほど突飛で主観的であるから。」⁽³⁵⁾「こういうトドメのことを用意しているのである。まさに問答無用である。クヌマンはみずからの安直な二分法論理に酔いしれた暴君としか思われない。

五

したがってこれ以上議論しても無駄なはずであるが、クヌマンの文章はまだ続くので我慢して聞くことにしよう。

「確かにわれわれの文学は四元素のイマジユによって通りぬけられている、しかしその頻度は肉体、金、植物、天体のような他の現象より多いとは何も示していない。」⁽³⁶⁾

△通りぬける▽という奇妙なことを用いたのは、バシユラルの考えを現実的でも真実でもないと言言したばかりだからであろう。今度は四元素のイマジユの存在すら抹殺されかねない。ただ、四元素が分類原理であるとすれば、ここにクヌマンがあげた現象はいずれかの元素の中に分類されるはずであり、バシユラルの四部作の目次だけでも見るならばそのことは氷解するのだが、クヌマンには△おそらく▽そのひまも興味もなかったであろう。実体と機能をすりかえるクヌマンのフォルマリスト指向は次の個所で明らかになる。

「こういうイマジユ群の機能^{フォンクシオン}は何か。バシユラルは水のイマジユ群の中に、まずそれらの役割がなんであらうと、より抽象的な実在の象徴的表出を見ようとしばしば試みた。バシユラルはこうして、ある作品の真の

題材は、おそらく質料そのものではなく、質料の象徴するものであるというまったく逆説的な結論、かれの主張のエレガントな逆転に導かれるのである」⁽³⁷⁾

こういう結論に導いてきたのはクヌマンであり、決してバシュラールではない。どうして一番重要な断定の中に「おそらく」という条件緩和の語をしのびこませ、そこから導きだされる結論ではまったく大胆不敵な断定をおこなうのだろうか。そしてここでもまた「真の」という隠れ蓑を題材ということばに着せている。しかしこの個所の指摘はやはり重要な問題であることに変わりはない。幸い具体的な例が出されているのでそれを見よう。

「たとえば、バシュラールはときに水を液体の象徴だとする。しかし水が唯一の液体の元素だという間違った推論をする。「質料化する夢想にとり、あらゆる液体は水〔複数〕であり、あらゆる流れるものは水に属するのであり、水は唯一の液体の元素である。」「バシュラール」。しかしバシュラールが文学から借りた例では、水は固有の価値をもつイマジユであるところか、象徴の価値をとり、そしてたとえば根源的液体となる。その液体の中には人体のあらゆる液体——血液、乳、尿、精液、涙などが溶けているのである」⁽³⁸⁾

まず分類原理としての水と、単純な水のイマジユとの区別を明瞭にしないための混乱があるというのであろう。バシュラールの文章の中にもそうした箇所は確かに多い。しかし水という一物質を四大元素のひとつとして分類原理にまで昇格させるためには、水は水としての属性を極端に拡大しなければならない。さらにそれは他の三元素の比較の上で示差的相対的な特性にまで発展させられる。乳は乳であって水ではない、という素朴實在論的な、アトミスティックな見地からすれば、四元素の分類はそもそも成立しないのである。しかし實在論者も乳が水とよく似た性質をもち、そこに共通点のあることまでは否定できないであろう。さらに水が大地をうるおし、大地を養うといった比喩において、水がいわば乳としての機能を大地に対して持つことも認めざるをえないであろう。想像力の世界で水は

滋養ある液体として機能したことも過去に事実として存在している。ところがクローヌマンは元素のイマージュを機能として捉えず、つねに実在として固定化するのである。

またイマージュが、イマージュにとどまらず象徴になるという点については、すでに指摘したイマージュの両極性を想起してもらいたい。しかしイマージュがそれ以外の「より抽象的現実」を表出する場合でも単なる記号になってしまふことはない。クローヌマンはやつきになってイマージュと象徴を区別しようとするが、この区別がそんなに容易にできるとは思われない。なぜなら「より抽象的な現実」にしてもイマージュの中にとけこんでいるのであり、イマージュの機能は、あくまで不在の何物かをまず再現し、その中で「より抽象的な現実」も指示するのがその機能なのであり、何ら逆説でも矛盾でもない。その機能をたちまち固定化し実在化しなければ気のすまない二分化論理一本やりの石頭だけが、逆説だ矛盾だとさわいでいるにすぎない。しかしクローヌマンのいい分をもう少し聞こう。

「もし質料的想像力が、水の中に他のあらゆる液体を トランスフォーム 転換するのなら、水はもはやバシユラールのいう第一の実体ではなくて、それが意味する現実の第二次的な象徴であると答えることができる。たとえば水は血液の象徴とすることができるが、血液そのものは死や暴力の象徴である。乳は、乳母のイマージュ、精液は男性的な活力のイマージュである。」⁽³⁹⁾

こういうふうには一次的、二次的という区別は一見明示的であるが、はたしてその実際の関係はそれほど単純であろうか。水はあくまでも水で、血とはつねに別のものというさきほどのクローヌマンの言辭が当然想起されるであろう。一次的二次的という区別にしても、水と血液、乳と水とがもつ夢想内での自由な転換のメカニズムが働かなければ成立できないことなのだ。この転換こそバシユラールが精力的に分析を集中したことではなかったか。一次的、二次的という比喩の次元の区別をクローヌマンはまたも素朴に実在化しているようにさえ思われる。

「それ〔河〕は大地の実体の液化であり、それは大地の襞ひだのもつとも奥深く隠されたところに根をおろした流れる水の噴出であり、乳房を吸う大洋の誘引による乳の噴出なのだ。」⁽⁴¹⁾

このようなクローデルの水の変貌を一次的・二次的という分類で説明できるのだろうか。パシュエールの説明はこうである。

「ここでは一体何が支配しているのであるか。フォルムだろうか質料だろうか。砂洲の乳首をもつ河の地理的輪郭だろうか、それとも液体そのもの、生体の精神的な液体、すなわち乳であろうか。だが、乳を吸う大洋に結ばれた河口を人間のように力動化する本質的に実体的な解釈によらずして、詩人のイマージュに参加するどのような媒介物があるのだろうか。」⁽⁴²⁾

というふうに詩的イマージュの美が内面的な質料による価値づけによることを説明し、さらに「無意識にとつては水が乳であり、それはしつに頻繁に科学的思考の歴史上で水が大いに滋養になる元素エレメントだと見なされていたからだ」ということも付記している。かつては栄養摂取は重要な説明原理であったし、また「大地は水を飲む」と本気で考えられていて、水は「大地と空気を養う」召使だとファブリキウスなどは考えていた。要するにある時代には水はそれだけで乳とみなされる機能をもっていたのである。こういう背景が水に大きな価値を付加していたのである。

水が、クローデルのテキスト中のどの点で一次的、どこが二次的かをクローヌマンなら正しい根拠をもつていうことができるのだろうか。

「もしわれわれが水のような象徴をこのように分解するとしたら、基本的なものや恒久的なものとしては何が残るのであるか。水はそれが象徴化する液体、前後の脈絡や状態にしたがい水が表わすことのできる人間の状況、思考、情熱のある分野以上の重要性をもつことはない。」⁽⁴³⁾

水が一次的二次的な象徴活動をおこなうことの可否はおくとしても、それは水のイマージュの機能であることはクレーマンといえども認めねばならないであろう。そうでなければ血は血であって水ではないという単純な実在論に逆もどりするのだから。ところがまた水を象徴として分解すると、「基本的なものや恒久的なもの」はもはや水に何も残らないというのである。水を電気分解すれば水素と酸素となり水は残らないという幼稚な化学的知識のアナロジーであろうか。水の質料因はまさにこの機能の表現なのであるから、象徴に昇華されても、水のイマージュは依然水としてそうした機能を保持するであろう。基本的とか恒久的ということばも水のイマージュの機能にあたえられた限定辞にすぎないのである。

したがってクレーマンのこの文章の後半は水のイマージュの価値をおとしめるつもりで書かれたのであろうが、水が象徴として表わすもの以上の価値はもたないということは当然であり、むしろなぜ水がそういう象徴の価値をもちうるのか、という問いこそバシュアールの発した問題なのだということをくりかえしておく。

だから水が他の液体と同じだけの重要性をもつというだけでも、決してバシュアールのいう水をおとしめたことにはならない。水は変貌して他の液体になると、それらの価値を受容していくのである。

さてクレーマンの最後の断定を聞こう。

「われわれはしたがって、バシュアールが望んだように恒常性や恒久性という特性が質料の中に存在するのではなくて、特性は自然に対して人間の属性をあたえる（アントロポモルフィゼ||擬人論化）という人間の矯正できない傾向の中にあると結論できるであろう」⁴⁴

バシュアールは質料を恒久的とか恒常的だと主張したりはしない。想像力の質料への働きかけ、質料的イマージュの機能が人間において恒常的ではないかという指摘をしているだけである、そしてそのために文学のイマージュを中

心に詳細な分析をしてきたのである。クローヌマンがいうアントロポモルフィゼとは、十八世紀後半に神性を人間化して考える異端な解釈を示した語であり、今さらごとくもちだしてバシュラールの仕事を総括できるようなことばではない。さんざんバシュラールの方法にけちをつけておきながら、クローヌマン先生が結論にうやうやしくもち出したことばはバシュラールが数十年も昔批判的に使用したことばなのだ。

しかし、クローヌマンはこの擬人化の傾向を人間の△矯正できない√性質というふうに規定しているが、これはさしずめ西洋人だけに特有の傾向なのであろうか。少くとも現代のすべての西洋人に特有だということはできるにちがいない。だとすれば、実験室における科学者も例外ではあるまいし、当然のことながらかれらの思考の所産である自然科学の理論にもその影を落しているのではないだろうか。もしクローヌマンがこういう結論を否定するのであれば、西洋の自然科学者は人間のカタゴリーからはみだすことになる。こういう矛盾した結論に導く覚悟をもってクローヌマンは△矯正できない√ということばを用いたのであろうか。

バシュラール自身がこのことばを初期においてどう理解していたかを示す文を引用しよう。

「実在の細分化した様相アズベに対するわれわれの唯一の表現方法は現在のところ神人同形同性論(擬人論)である」(『近似的認識論』一九二八年)。

科学が実在の新しい様相を発見した場合、それを命名するのに頼るのは既成の言語体系しかなく、それはまさに人間中心の価値体系であってみれば、新しく発見された科学上の現象は、昔の神人同形同性論の神と位置を交換することになるのである。

神の場合とちがって、事象の細部については適用される用語は対象とびったり一致しないであろうし、大体が大まかにすぎることになるのではあるまいか。そしてまた人間的な既成の価値が付属して、対象を無益にゆがめるおそれ

がある。こういう事態をクローヌマン先生は考えた上で使っているのだろうか。

バシュラールは『新しい科学的精神』や『科学的精神の形成』において、頭脳に反して自然科学者が思考し、新しい発見にそなえる訓練をするよう説いているが、それははからずも人間性にひそまざまの△矯正できない▽傾向を意識したからであり、あらゆる方法によってそれを矯正し、対象との△正しい関係▽をもてるようにするための方策を考えたのである。そして一方、それとは正反対のポエジーの軸に、イマージュを愛好し、その中に戯れる悦びの積極的解明の試みが質料的想像力の提唱となったのである。こういった背景を全然無視し、バシュラールの質料的想像力を否定しさろうとする野心家クローヌマンは、はたして『水を夢』を△本当に▽再読したのであろうか。一度でもその全文を△実際▽に読んだのであろうか。またこういう暴力的な断罪をひとりの著者に対しておこなうことが、△再読▽などという見出しの下ではたして許されるのか、という『ポエチック』誌編集部への抗議の念とともに、深い疑念をクローヌマンに呈しておきたい。

こういう現象は、ひょっとすると根がもつと深く、フォルマリストによるマテリアリストの断罪といったことだけではなく、(バシュラールをマテリアリストに分類しては、かれから異議が出されるであろうが)、ものに対する人間のかかわりの深いきずなの変質を示すのではないか、という疑惑が生れる。バシュラールの四部作で分析された質料的イマージュの例は、一部をのぞいてもはや牧歌的なもの、過去の樂園からの歌のように思われてくるからである。人間は幼いときの行動のシエマを事物との交渉によって形成する。あるいはシエマの形成にあたってものを媒介とする。そのとき地水火風の四大元素がどれほど深い影響をシエマにあたえてきたのか、ほとんど測りつくせないであろう。

しかし、とくに最近の文化や教育の発達は、そのシエマの形成期の母親や父親の役割を減少させ、同時にものとの

自然なかかわりの機会も少くさせる傾向があるが、こういった傾向が西洋においても顕著になりつつあるのではないか、ということである。クヌマンはもはや水というイメージに水道の水しか思い浮べることのできない「文明人」の代表なのではあるまいか。そうだとすれば、質料的イメージの貧困化の病根はさらに深刻であるといわねばならないのである。

以上クヌマンの所説の大筋に対し私見をのべたが、細部において聴くべき点があったわけではない。バシュラールの表現の多義性についての分析などには、矛盾をついているところがある。しかしそれもバシュラール理論の否定を急ぐという方向ではなく、一体その矛盾が何を意味するか、多義的に表現せんとしていた現象への関係を視野に入れて考えて見た方が、より生産的であろうし、何よりも文学的創造力、文学的イメージの構造の解明に一步でも接近することになったであろうにと、惜まれるのである。(一九八〇年九月)。

注

(1) Katrine Keuneman, *L'imagination matérielle chez Bachelard*, in *Positive*, revue de théorie et d'analyse littéraires, N° 41, février 1980, Editions de Seuil, pp. 128—136, (traduit de l'anglais par Marc Porée et Marc Leroy) 以下 KK と略。

当然のことであるが、このフランス語の訳文が忠実に原文を訳したものであるという前提に立って、拙論が書かれたことも付記しておかねばならない。また著者名の日本語表記は一応フランス語読みにしたがう。

(2) 著者は作品の独立性を暗黙の前提にしているが、この作品とは芸術作品、文学作品のことを普通はさすのであり、その独立性、あるいは完結性、さらには閉鎖性まで、芸術においてはひとつの価値を形成することは私も異論がない。しかし、前後の作品との関係が、その作品の理解に役立つこともやはり否定できないことであろう。クヌマンは『水と夢』を文学作品ではなく文学研究の著作、理論的作品とみなしている。バシュラールの文体をあまりに文学的だと批判しているほどであるからそ

の点は疑いない。するとバシユエールの連作のうちなぜ『水と夢』が取り上げられたのか、その理由が判然としない（おそらく副題のせいであろう）が、理論的著作、しかも四部作の一作だけを取りだし、完全な独立性を要求することは、ジャンルを取りちがえ、見当ちがいの価値を要求していることになるのではあるまいか。

あえていうなら、クヌマンのいう方法的厳密さがむしろその視野の狭隘さのカモフラージュとなっているのではないか。そして論文の題名の過度の拡大化は、このへ厳密な方法√がいかにまやかしてあるかを図らずも曝露しているのではあるまいか。

(3) Gaston Bachelard, *L'Eau et les Rêves. [Essai sur l'imagination de la matière]*, José Corti, 1942. (Nouvelle édition, 1956) pp. 1—2.

(4) *Ibid.* p. 3.

(5) *KK.* p. 129.

(6) *Ibid.* p. 129.

(7) 「あたかも物理学者が現象を起動因の流れの中の一断面として捉える場合にのみ、現象を理解するように」という比喩が続いている。Bachelard, *Lautréamont*, José Corti, 1939, Nouvelle édition augmentée, 1956, p. 153.

(8) 小井戸光彦氏との共訳（国文社）は現在改訂版を印刷中である。

(9) *KK.* p. 129.

(10) (11) (12) (13) (14) (15) *Ibid.*, p. 130.

(16) *Ibid.* p. 130—131.

(17) (18) *Ibid.* p. 131.

(19) 久米博著『象徴の解釈学』、新曜社、二〇八ページ。なお「作品からテクストへ」はバルト『物語の構造分析』（花輪光訳）みすず書房に収載されている。

(20) *KK.* p. 131.

(21) (22) (23) (24) (25) *Ibid.* p. 131.

(26) バシユエールはこういうふうな現実から一歩しりぞき、現実について夢想する人間の傾向を、非現実機能 *fonction de l'irréel* と名づけ、それが決して現実機能の低下などではなく、正常な人間行動の不可欠の機能であることを力説している。

(27) (28) *KK.* p. 132.

- (29) *KK. p. 134.*
- (30) とくに晩年の『夢徳の詩学』参照。
- (31)、(32)、(33) *KK. p. 134.*
- (34)、(35) *Ibid. p. 135.*
- (36)、(37)、(38)、(39) *Ibid. p. 136.*
- (40) 「作品は(せいぜいのところ)多少象徴的である……。テキストは根本的に象徴的である。その完全に象徴的な性質を抱懐し、知覚し、受容した作品がテキストである。」(バルト)(久米博、前掲書)
- バシユラールのいう元素のイマージュが、二次的、あるいは象徴的だというクレーヌマンの指摘は、このバルトの△テキスト▽の本質を表わす特徴と符合し、期せずしてバシユラールの分析の方向の△正しさを示しているように思われる。
- (41)、(42) *Bachelard, op. cit. pp. 166—167.*
- (43)、(44) *KK. p. 136.*